中小企業のデジタル化を推進するためのコアインボイス活用(前編)

三分一信之

三分一技術士事務所所長

ISO/TC 295/SG 1 Convener

# JP PINTは万能薬か

電子請求書の普及によって、会計データの標準化や、経営に役立つ情報の共有が促進されることも期待されています。これは、税理士や企業が効率的に会計処理や税務申告を行うための重要なステップです。データの一元管理が可能となり、データ入力のミスを減らしたり、情報の検索や分析が容易になったりします。これにより、経営の効率化やコスト削減が実現できます。

令和２年１２月、内閣官房IT総合戦略室は、日本における電子インボイスの仕様を標準化するために、国際的な電子商取引ネットワークの標準、OpenPeppolを基盤にすることを発表しました。これにより、日本のPeppol（JP PINT）が生まれ、その運用を監督する機関が整備されました。

ただし、各種の電子請求書を相互連携させるには、電子データ交換（EDI）を含む全ての請求データをやり取りする「日本版コアインボイスモデル[[1]](#footnote-1)」が必要です。そして、そのモデルとEDIの構文を組み合わせた「コアインボイス　ゲートウェイ」でEDIと電子請求書を接続することが可能になります。

現在のJP PINTのサービスプロバイダは、オープンペポルの電子請求書しか受け付けていないため、対象範囲が限定されています。そこで、「構文バインディング」が重要な役割を果たします。これは、異なるXML構文や論理モデルを統合するための技術で、EDIと電子請求書を相互運用することを可能にします。

ゲーム画面のスクリーンショット

中程度の精度で自動的に生成された説明

それぞれの企業の会計データを標準化し、共通のインタフェースを通じてデータを参照可能にすることで、税理士や企業が税務申告をより効率的に行うこともできます。さらに、標準化されたデータは、経営判断に必要な情報を提供し、企業の競争力を高める役割も果たします。

# 貨物船コンテナの積み替え作業に例えると

貨物船の輸送におけるコンテナの積み替え作業を例えに取りながら、コアインボイスというシステムについて説明します。

コアインボイスは、中小企業共通EDIやJP PINTなどの異なるデータ形式で表現された請求書を、一つの共通の形式で統一的に扱うためのシステムです。港でコンテナを積み替える際に、ピッキングリストに従って請求金額、商品名、数量、金額、税率などを取り出し、指定された船倉に異なったまとめ方で格納します。

この作業は、自動運転されるクレーンによって行われ、コアインボイスの論理モデルの定義表やピッキングシート、格納指示リストなどに基づいて指示されます。これらの指示は、タクソノミで定義された辞書によって表現されます。

このように、コアインボイスは異なるデータ形式を統一的に扱い、効率的な請求書の処理を可能にするシステムです。日本版コアインボイス　ゲートウェイは、このシステムを実現するための機能を提供するものです。

コンテナの積み替え作業を例えにとった説明を続けます。コアインボイスシステムは、まるでコンテナ積み替えのように、異なる形式の請求書を一つの共通形式に変換し、それを統一的に管理する役割を果たします。

# 構文バインディング

構文バインディングという言葉は少々専門的ですが、簡単に説明すると、異なる形式のデータを一つの形式に統一するためのルールや手順のことを指します。それを用いることで、電子請求書の情報を容易に取得・設定できるようになります。

例えば、ある情報を表すために異なる会社がそれぞれ違う形式を用いていたとします。一方は「商品名-数量-価格」の順で、もう一方は「数量-商品名-価格」の順で情報を表現しているとします。このような場合、同じ情報でも表現の仕方が異なるため、それぞれ異なる読み取り方をしなければならず、その都度読み方を変える（プログラムを改修する）のは非効率的です。

そこで、構文バインディングを導入することで、「商品名-数量-価格」の形式に統一するといった具体的なルールや手順を設けるのです。これにより、どの会社からの情報であっても同じ読み取り方ができ、効率的に情報を取り扱うことが可能になります。

たとえば、ある企業が別の企業から商品を購入する際に、それぞれの企業から異なる形式の請求書が送られてきたとします。ここで、それぞれの請求書を個別に処理しようとすると、手間と時間がかかり、エラーが発生する可能性もあります。

しかし、コアインボイスを使えば、異なる形式の請求書を一つの共通形式に変換し、統一的に管理することができます。これにより、請求書の処理が効率化され、エラーの発生を防ぐことができます。

コアインボイスの活用は、取引のスムーズな進行だけでなく、企業の経営効率化やコスト削減にも寄与します。経理部門の作業負荷を軽減し、より重要な業務に集中できるようになるためです。

また、コアインボイスは、取引データの一元管理を可能にします。これにより、経営判断に必要な情報の把握が容易になり、迅速な意思決定を実現できます。さらに、税務申告の際にも、一元管理されたデータを利用することで、効率的な申告作業を実現できます。

コアインボイスは、企業がデジタル化を進める上で重要なツールと言えます。これからの時代、企業は様々な形式のデータを効率的に扱う能力が求められます。コアインボイスを活用することで、企業はデータの扱いにおける効率性と正確性を確保し、競争力を高めることができます。

# 欧州規格の異種構文間バインディング

欧州では、電子請求書の普及を推進するために、共通の標準を設けています。これは、各国で異なる標準が採用されていたため、国境を越えた商取引が阻害されていたという課題から生まれました。

具体的には、欧州議会および理事会の「指令 2014/55/EU」に基づき、電子請求書の最低限の共通構成要素を「コアインボイス」として規定しました。また、各国で採用されているXML構文（データの表現形式）の中から普及しているものを選び、「構文バインディング」（情報の統一形式）を規定しました。

こうして、欧州各国の異なる標準を一つの形式に統一することで、国境を越えても同じ読み取り方ができるようになり、商取引のスムーズな進行が可能になりました。

■

1. この論文の日本版コアインボイスは、欧州規格のコアインボイス（Core Invoice Usage Specification）に触発されて命名しました。欧州規格のコアインボイスは、欧州で使用されている電子請求書の標準形式です。 [↑](#footnote-ref-1)